

第7章 模索期 困難な状況下次世代への模索 年表

- 1988年（昭和63年） 第1回対同志社定期戦が同志社大学田辺校舎で行われた。結果は2—5で本塾の負け。（6月）
諏訪隆博10年ぶりに体育会本部兼任常任委員選出。（10月）
平部長退任される。新橋第1ホテルで送別会が行われる。（2月）
- 1989年（平成元年） 高宮利行文学部教授、部長就任。（4月）
第37回早慶バドミントン定期戦で12年ぶりに勝利。結果は10—5で最優秀選手に土屋雅人が選ばれる。（9月）
- 1990年（平成2年） 諏訪隆博、関東学生選手権第3位。慶応勢々々の上位進出。
第38回早慶バドミントン定期戦で10—5と大勝し、2連勝を果たす。最優秀選手賞に奥出裕充が輝く。（9月）
平成4年に体育会創立100周年をむかえるにあたり連合三田会において、体育会各部対抗リレー実施、バドミントン部は予選落ち。
三田バドミントンクラブの援助により関西遠征を実施した。対戦校は、立命館、京産大、同志社、近大、龍谷、大経大で、関西リーグの1部校が中心だった。結果は1勝5敗。（3月）
春季リーグ戦で2部最下位となり、入替戦で、青山学院に敗れ、史上初の3部転落。同時にインカレの団体の出場権を失う。（5月）
秋季リーグ戦で3部優勝し、2部復帰をかけて入替戦に臨むが、再度青山学院に敗れ、3部に留まる。（10月）

概説

全体の流れとしては、部員減少、戦績の低下ということが言え、平成3年春にはついに史上初の3部転落という事態に至った。ただそういった中で、平成元年、2年と慶早定期戦で2連覇を果たしたことが、この期の唯一の明るい話題だったかもしれない。

以下、年度ごとに簡単に振り返ってみたい。

昭和63年度 今年度は、4月に新入部員を男8人女5人迎えスタートした。但し、下級生はまだ戦力として期待出来ず、上級生中心で戦うこととなった。春のリーグ戦は今ひとつ波に乗れず、2部5位という不本意な成績に終わった。つづく関東選手権は、諏訪がベスト32に入った。この年の6月、初めて同志社大学と定期戦が行われた。夏の合宿は孀恋で行い東日本学生選手権に臨んだ。ここで、諏訪と加藤がシングルズでインカレ出場権を獲得した。全般的に見て、塾の弱点はこのころダブルズと言われており、これが、つづく秋のリーグ戦でも如実に表れた。

平成元年度 この年より部長が平先生より、高宮文学部教授へとバトンタッチされた。このころの塾の課題は下級生の強化であり、2月から徹底した基礎トレーニングが繰り返された。春はトヨタに出て合宿を行い、社会人の練習の厳しさを垣間見る機会にも恵まれた。春のリーグ戦では、2勝3敗であったがポイント差で5位に終わった。つづく関東学生では、加藤・高田組のダブルズ、諏訪のシングルズがそれぞれベスト16に入り健闘した。夏の練習での最大の目標は早慶戦であり、これにむけて、相当厳しい練習が組まれた。そして、9月の早慶戦では、土屋・高田組のダブルズが、フライングラストオールの末ポイントを上げたのが大きく、12年振りの勝利となった。しかし、つづく秋季リーグ戦では5位に終わった。この年は、1年生が男子1人しか入らず、(女子は2人)今後、部の状況が厳しくなることは予想された。

平成2年度 去年の、主力メンバーだった4年生が卒業し、戦力低下は否めなかった。そこで、春先から、厳しい練習が続ぎ、合宿では、勝沼で金子寛先輩の御世話に、サントリーでは山本次生先輩、宮崎克巳先輩の御世話になり、充実した合宿を行った。4月には新入生7人が加わり、部の活気も増したが即戦力ということにはならなかった。結局、春リーグは全敗で史上2度目の入替戦(2部—3部) 出場となり、非常に緊迫した雰囲気となった。しかし、3部との差はまだ大きく、完勝で2部残留となった。秋にも再度全敗し、入替戦に出場したが卒業しなんとか今年度は2部を死守した。戦力低下が叫ばれた年だったが、主将の諏訪が関東学生で3位になり、又、早慶戦で2連勝するなど、諏訪主将を中心に弱いながらも、よくまとまっていたと言える。

平成3年度 昨年のエース諏訪が卒業し、さらに苦戦が予想された。新戦力も今ひとつ伸び悩み、昨年以上の危機感があった。春には、OB会からの援助で関西遠征を行い、試合練習を積み実戦経験を養った。ついに、春季リーグ戦が始まったが黒星を重ね入替戦出場となった。入替戦でも、青山学院大に完敗し史上初の3部転落となった。この時の塾バドミントン部のシヨックは相当なものであった。秋には、春の雪辱を期しリーグに臨んだが、3部優勝し入替戦に出たが青山学院に4—2で敗れ春の雪辱はならなかった。

(大束 記)

主務の思い出

平野 一博 (平成元年卒)

昭和60年4月、私は慶応義塾に入った。その年の秋、体育会バドミントン部に入った。私は自分の意志で入った。そして、多くの素晴らしい人達に出会った。今、良く考えてみれば(未だ7年前のことではあるが…)それは全て「運」と「縁」なのだと思う。最近、よくそう思う。

人生の未だ4分の1しか生きていない若輩者にとっても「人生」というものは本当に「運」と「縁」による処が多いと感ずる。良きにして、悪しきにして、そういつた事はあるものだが、意外にも自分にとって良い事、良かった事が多い(私は楽道家だからという人もいようが。)今日、学生時代の喜怒哀楽の情を思い出し、出してみることにした。
アクト1—「喜」

1、最上級生になった日……この日は、それまでの日々の苦勞なんかは飛んでいき何をやる訳でも、出来る訳でもないが、新たなスタートを感じた日であった。

1、最初に新人戦で勝った時……本来、自分が持てる力をフルに出し切れなかったけれども「勝った」という事実には変らない訳であり、他人にどう言われようとも心の中は「喜」の1文字が浮かんでいたのである。

1、日吉の並木グッツェが終わった瞬間。

これは説明不用だと言うが、しかし小俣主将の時のそれはエグかった。

1、体育会専用風呂に練習後、つかった時。但し、これには(注)が付くのだが、剣道、柔道部の奴達と一緒にになった時は最悪の状況である。自分の汗臭さなんて可愛いものである。

1、主務になって、OBの方々や横の体育会のつながりを持てたこと。……学生時代の出来事はどれもこれもお金にはかえられない貴重なことばかりだが、人という財産は目に見えないだけに最大の「喜」と言えるものである。

アクト2—「怒」

1、私が4年で主務だった最後の秋のリーグ、慶早戦。……確か、結局3—4で負けた試合だったと思うが、勝てると思って負けてしまった中でもあんなに悔しいゲームはなかった。私はレギュラーメンバーに怒りをぶつけずにはいらなかった。引っぱりたい手を自分で抑

えることが出来ない位の気持ちであった。(皆はわかっていたのだろうか。)

1、練習中、試合中での自分自身へのむかつき。………これはしようちゆうあって結局最後まで克服することはできなかった。

アクト3「哀」

1、試合に負けた瞬間。………特にその試合の為にこれだけはやっておこうと必死で練習した事が実行できなかったり、何をやっても失敗してしまったり。何の為に練習してきたのか、何の為にあんなに辛い思いをしてきたのかと思うことが少なくなかった。

1、バドミントンというスポーツが個人競技でありながら団体戦が多く組まれている中で、個人個人の団体意識の薄さが顕著である点。

…主務という役割につくと部員1人1人のことを考えるようになる。よく見ているとそれぞれでバラバラの事をしている。「勝つ」という1つの目的の為に各人は努力している。しかし、相乗効果を生み出すことが少ない。この点は今後の課題であり、1つでも多く勝つ為のキーポイントになると思う。

アクト4「楽」

1、試合で勝った後の宴会

1、合宿を終えた後の宴会

私はやっぱり酒好きなのか、事を終えた後の宴会は忘れられない。OBとの語らい。先輩、後輩、同輩との会話は途切れることなく続く。私は本当に貴重な財産を得たとその時に1番強く感じる。

慶早戦勝利

加藤 正裕 (平成2年卒)

“慶早戦勝利”。それは私達が掲げた最大の目標であった。伝統ある慶早戦で皆と喜びをわかち合うこと、つまりは、慶早戦の場で勝利を納めることが清水監督はじめいろいろと御指導下さった諸先輩方に対しての1番の恩返しを意味すると同時に、私達が学生生活を通じて育んできた、つたない経験の結晶であると感じたゆえに、是が非でも達成すべき、最大の課題としたのである。

しかしながら、慶早戦で勝利を勝ちとるまでには、幾多もの難関が待ち構えていた。私達の目の前に立ちはただかる大きな壁は言うまでもなく非常に高いものであったが、先輩方より承る御尽力に加え皆が1

つの目標にむけて努力を重ねてきた結果、私達は幸いにも12年ぶりに勝利の美酒を味わうことが出来たのである。私にとつて慶早戦で勝った喜びは学生生活を通じての忘れられない思い出の1ページを飾るとともに今でもその勝利の瞬間が脳裏に焼きついて離れません。なかでも私が最も印象深く記憶することは、下級生の頑張りと頼もしい同期の活躍する雄姿と協力があつたことで是非伝えておきたいと思う。

ここで入部してまだ1年目の頃を思い起こしてみると、まだ慶早戦の意味する伝統の重みやその場で勝つことの重要さを今ほどには感じとつていなかつたことを思い出す。ただ、慶早戦には一種独特の雰囲気や漂っていることに加え、勝負に對する執着心には変りないもののリーグ戦などとは全く異質な先輩方の熱い眼差しがそこにはあつたことを記憶する。

やがて私も最上級学年を迎えるに至ると今までの空しい経験から、義塾で学べることの喜び、そして伝統ある慶早戦で勝つことの意義を、主として諸先輩方から御聞かせ頂く貴重な体験談など通じて、多少なりとも認識するに至つた。クラフアの主将になつてからなおのこと慶早戦では是が非でも一花咲かせ有終の美を飾りたいという気持ちがあるばかりであつた。10単5複という壮絶な総力戦を演じる慶早戦では勝つとなると個人に要求される技術レベルや強い精神力はもちろんのこと、部全体での底上げがなければ達成は難しい。ゆえに伝統ある慶早戦で宿敵早稲田に勝つことには意味があることに加え、愛塾精神や後輩の育成に最も役立つと判断した。それからというものは今まで見劣りしていた基礎体力の向上、下級生のレベルアップによる活性化に重きを置いた練習に励む毎日が続いた。日々の練習を通じて個人個人が、様々な考えを抱きながらも1つの目的に向けて頑張つてきてくれた。なるべくバラエティーに富むよう心掛け、加えて諏訪君以下、下級生も努力してきてくれたことも忘れられないことである。そして幾つもの不安を残しながら臨んだ慶早戦ではあつたが、力強い先輩方からのアドバイスを支えに部員全員が持てる力の全てを發揮してくれた。私達は幸いにも12年振りに10対5という大差で勝つことができたのである。夢にまで見たこの瞬間には格別の思いがあります。

私も卒業してから2年あまりが過ぎようとしております。社会に出てまでもない私ではありますが、体育会バドミントン部で培つてきたことは、私の心のよりどころとして大きなウエイトを占めています。本当に素晴らしい経験を味わえたこの4年間に感謝するとともに、現在頑張っている現役諸君にも是非心に残る思い出を作つて頂きたいと思ひ

ます。現状は厳しさが増すばかりであり非常に険しい道のりが待ち構えているようですが“練習は不可能を可能にする”を相言葉に日夜努力し勝つことの喜びを味わっていたきたいと切に願っております。

良き先輩後輩に恵まれて

喜多 和夫 (平成2年卒)

慶応義塾体育会バドミントン部が創部50周年を迎えた事、心からお祝い申し上げます。「50周年記念誌」への寄稿依頼を受けてとまどいを覚えつつ、せっかく依頼されたのだから自分なりにバドミントン部への思いを表せればと思っています。

たまたま中学・高校とバドミントンをやっていた事と、派手なイメージのあるサークルには田舎者の自分ではついていけないという思いとが合わさり体育会に入る事となった。一般に言われる「体育会は厳しい」という常識？すら知らないまま入部してしまっただけである。実際に練習に参加して、なんとなく毎日のように通うようになり、だんだんお客様から部員へと立場が変わっていく。「これは大変なところに入った。」とは何度か思ったが不思議なことに、つらいからやめようと思った事はなかった。その理由を考えると、やはり良き先輩がたくさんいて、何かしらいつも心配してくれるのをはじめていたからだと思う。今、4年間の体育会の生活を終えて（さらに2年余りが経っているが）振り返ってみると自分は実に多くの良い先輩に恵まれている人間だと思う。現役部員であった時のみならず、今でもいやな顔ひとつせずいろいろな相談にのっていただけ先輩をたくさんもっている事は大変うれしい事である。

そのようなバドミントン部における1番の思い出は、慶応義塾体育会にとつての一大イベントである慶早戦の企画・実行を、3年生の副務の時は補佐し、4年生の主務のときは中心になってやり、しかも主務の時は12年ぶりの勝利というおまけまでもらった事である。1つの大会を開催するにはどれほど多くの人の協力が必要かという事を身をもって勉強する事が出来た。そして、今でも各種面で協力してくれた方々、後輩には感謝の念が絶えない。逆に、協力していただいていた自分も今後出来る範囲でバドミントン部に協力しなくてはと思っています。

現在塾のバドミントン部は関東リーグで3部と少し低迷している様

だが、ここで奮起してもらいたい。「練習ハ不可能ヲ可能ニスル」という言葉通り、塾バドミントン部の先輩たちは毎日の厳しい練習によって鍛え上げた技と体力と精神力で、自分以上の相手を倒してきたのだ。大きな差もコツコツした努力で少しずつその差が縮まり、いつの間にか追い付き追い越してしまふ事を信じて、そして突破して欲しい。とかくバドミントンは個人スポーツなので個人の殻に閉じこもりがちであるが、いろんな人の経験・意見に耳を傾けながら自分のプレーというものを作り上げてもらいたい。

今回、創部50周年という節目を迎える事になったが、今後も塾バドミントン部はどんな歴史をつくっていく事になる。その1つ1つの歴史をつくっていく部員すべてが、誇りをもってその歴史を語る事が出来る様に部が発展してくれる事を祈っています。また、「50周年記念誌」作成の為に協力されている方々に感謝します。

雑感

諏訪 隆博 (平成3年卒)



平成2年 優秀選手塾長招待会にて

社会人としての1歩を踏み出した自分にとって、慶応義塾体育会の一員として過ごした4年間で振り返ったときに、最も強く心に感じるのは、非常に素晴らしい方々とお会いできたことに対する感謝の念である。尊敬できる先輩、力強い友人、暖かい仲間、頼もしい後輩たちとこんなに多くの方々にお会いできたことは、私に取って強い誇りとなっており、かつ自分を支える最高の財産となっている。

こんな私も、実は、入学当初、体育会とサークルの区別がつかなかった。というよりは、体育会という言葉も知らなかったかわりに、練習は体育会のようなものしか認めていなかったという、何とも矛盾した状態の中にいたのである。したがって、体育会に入ることに何の抵抗もなく自然であったし、むしろ、こういう中でしか自分は練習などできなかった。そして、自分は、この瞬間から、様々な体験しながら、その中で、自分の生き方に大なり小なり影響を及ぼすことになる人々に数知れず出会い、現在の人生観を形成してきたのである。

幸いにも、自分は体育会本部に加わることができ、田舎からボツン

と出てきてバドミントンをやるしか能のない自分が、卒業時には実に多くの友達と知り合えるようになったことは、心より感謝している。慶応について、体育会について、学間について、恋愛について、大いに話し、大いに酒を飲んだ本部をはじめとする先輩、友人は、常に心より離れない。何をやるにも、何を考えるにも、純粋で真っ直ぐであったことが今も思い出される。

ここで、借越にも自分の体験を元に、慶応義塾体育会かくありき、ということを書きさせていただければ、1つに不屈の闘志であり、1つに両立を目指すことであり、そして最後に何よりも、真に豊かな人間性を創造することである。才能がないといえれば語弊があるかもしれないが、少なくとも他大学へ推薦で入学していく者たちと比べて能力の劣る自分たちが、その者たちと互角以上に戦い、勝利を収めることは、当然容易ではない。不屈の闘志とそれに裏付けられた豊富な練習量と絶ゆまぬ努力以外、切り拓く道はないのである。かといって、学生の本分である学問をおろそかにすることは、本末転倒もはなはだし。これら様々の苦難・壁をのりこえてはじめて最終到達点である、知力、体力、精神力の全てを兼ね備えた真に豊かな人間となりうるのである。

一事を成そうとする者がその過程で苦しむものは、至極当然のことであり、また、その苦闘の道なくして、喜びを得ることはできない。我々は、自ら慶応義塾の勝利という目標に掲げた集団であり、様々な形で努力を続けてきたのである。現役として、体育会部員の使命は1つ「勝利」であり、その結果以外に求められるものはない。プロセスでの苦闘は、全ての者がやっているものであり特別ではない。しかし、現在感じることが、こういった苦闘の中から、自らの生き方を模索し、悩むこと、そして多くの素晴らしい人々に出会うことによって得た大学4年間の結果というものが現在の自分の「人生観」であると思う。言いかえれば、4年間、自分の全てをかけてその競技・練習にのぞむこと以外、現役部員に必要なはない。豊かな人間になることは大切であるが、その点を強く意識した体育会生活は、「勝利」を目指す集団にはふさわしくない。あくまでも、人間性の育成は、4年間前向きに努力し、純粋に真剣であった結果として、おのずとついてくるものなのである。

現在、バドミントンを含めた慶応義塾体育会の全ての部員に必要なのは、競技に対する真摯な、ひたむきな姿勢である。なぜなら、この姿勢の背景には、自分の人生観そのものがついているからである。だ

からこそ、自分の全てをかけてほしい。そして、人生で最高の時代と思える時を過ごしてほしい。

体育会生活を振り返って

井端 隆（平成3年卒）



地獄の夏合宿を終えての記念撮影
於 清里

早いもので私が現役を退いてからもう1年が過ぎ、ようやく社会人の生活にも慣れてきた今日の頃、思いも寄らなかつた「50周年記念誌」への寄稿依頼に正直言つてとまどっている。果たして何について書けば良いのか、なかなか思いつかないので、とりあえず、まだ色あせていない4年間の記憶をたどりながら思ったこと、感じたことを書き連ねていきたい。

まず、私が入部した時、なぜ入ろうと思ったか深く考えなかつた事をよく憶えている。しかし、それは改めて考える必要もなく心の奥に固い目標が無意識のうちに存在していたからだろう。いうまでもなくそれは「強くなりたい」という向上心である。物事を考え、実行していく上でこの「向上心」を持つことがいかに重要であり、又、維持し続けることが難しいかを部活動を通じて本当に学んだと思う。

しかし、振り返ってみると日常生活は前述のような「向上心」云々等絶対に思いつかない呑気なものだったと思う。とにかく、朝早く起きたおぼえがほとんどない。あつてもそれは試合当日か、定期試験ぐらいで、そのかわり夜遅くの出来事についてはいろいろな事があったのを今でも簡単に思い出せる。中でも練習後、食事をとった後で（或いはとりながら）麻雀をしているともう終電は行つてしまつていて、仕方なく（予想通り？）諏訪の下宿まで（これがまた少し遠かつたのだが）テクテク歩いて行くというのは定番となつていて、幾度となくあつた。そして床についてからくだらない話に花を咲かせていると空は白んできてしまい、やっと眠りにつくのである。とまあこんな感じで1日が過ぎるのが普通でこれが酒飲んでカラオケみたいになんかバターンがあるのだった。

さて、肝心の練習であるが、ここで思い出す練習内容といえぼランニング、トレーニングばかりのような気がする。我部に在籍していた

以上これはどなたも思うことは同じではないだろうか。おかげ様で私も練習で1番得意なのはランニングであるとか秘かに自負していたのだ。しかし、本職のバドミントンで満足いく成績をおさめることの出来なかった私は、自分の練習への取り組み方に少なからず反省点があると思うし、現役諸君でも、もし「体力はついたけどプレーがどうも」等と思う所がある人は自分の姿勢を見直すべきだろう。練習とは「体力（筋力）をつけるためにするものではなく、それらをつけることによってプレーを向上させるために行うもの」であるという当り前の事を見失いがちなのだ。とにかく、練習はいつでも間違っても楽だとは言えないもので、なかには「記念館100本ダツシユ」や「階段50往復」（だったと思う）等、口にしただけですごいトレーニングもあった。けれども、終ってみると当時はもうたくさんと思ったことも多い。思い出になってしまうから不思議である。

引退して1年が過ぎ、つくづく我が部で素晴らしい先輩、仲間とともに練習できたことに喜びを感じている。練習に打ち込みすぎて(?)自分の誕生日を祝ってくれる人もいないとさびしがっていたら、飲み屋でビールにケーキで祝ってもらえたこともあった。そんな人達とともに慶早戦で2回も「丘の上」を歌えたときの感激を今だに鮮明に思い出す。こうしてみるとろろく授業も出ずに一応しつかりやっていったのは練習だけでも、こんなに充実した学生生活を送ることが出来た事を感謝せずにはいられない。それは、言うまでもなく今日まで我が部をここまでに立派に育て上げてきた先輩諸兄への感謝であり、仲間、後輩への感謝である。そして現役諸君には「勝利」に対して、あくなき執念をもって頑張ってもらいたい。私も微力ではあるが、我が部の今後益々の発展に貢献する所存である。

塾高コーチ

松井 隆志 (平成4年卒)

私が塾高コーチに就任したのは大学2年の納会の時であった。それまでは土屋さんが教えていたが、基本が全然出来ていないということを知りかされていたので、納会直後の冬合宿は基本ばかり行った。しかしあまりに教えることがたくさんあり驚かされることばかりだった。しかし、自分も昔はこんな風だったのだなあと思いつながら根気よく指導したつもりであった。だが、すぐに模倣し上達する者、それが出来



平成3年卒業生送別会
深夜大騒れの図

ない者、しかしほとんどの者が後者であったので、すぐには花は咲かれないと思った。就任当時1番困ったことは、高校生との接し方であり、大学生より純粋な高校生は精神的プレッシャーがないうちもやらないが、強く叱りすぎたりすると応々として反発するのである。このように高校生に対しては、言葉や態度の面、また怪我の防止の面にも非常に気を配らなければならなかった。私は大学2年の間は普段の練習、試合にも教えに行くことが度々あったが、3・4年になると、自分の大学における立场上、大学入学の為のインターハイ勧誘、関東大会、県大会に足を運んだり、監督・コーチ・OBの方々との話し合いをするともに自分自身の練習もしなければならぬのと、身体を休める暇もあまりなく、なかなか練習に顔を出す時間がなくなつた。その為、日々の切磋琢磨される練習にいかに取り組むかという面でもあまり刺激がないからか、どんぐりの背比べ的に同じように成長していった。よって朝から晩までみっちり教えることが出来る合宿に力を注ぐのは当然であった。約1週間で塾高生の心身の成長には大変驚かされた。

思い出深いのは、私が3年の時の夏の阿字ヶ浦合宿と4年の時の夏の長野合宿の2回である。阿字ヶ浦の時は、毎日朝6時半から砂浜をランニングさせ、競争心を沸き立たせるため順位をつけたり、リレー形式で行った。残念なことに体育館の使えない時が半日あり、中日のOFFにしようと思つたが、あまりにも皆が海水パンツを持っていたので海でトレーニングをしたこともあった。また長野合宿の時は体育館使用時間の5時以降に必ず1時間の猛トレーニングをし、その後宿舎が山の中にあり大変起伏に富んでいたのがバスの送迎をやめランニングで帰舎させた。激しいトレーニングの為の怪我防止に注意しながら心を鬼にしてコーチとして取り組んだことなどは懐かしい思い出である。約2年間コーチを務め、感じたことだが、高校生は人に負けたくないという競争心から生まれる根性、スポーツを通しての人間関係における協調の精神を身につけることを切望する。部員が30人近くもいたので将来性があり、7年計画として大学でもプレーを続けてほしいと思う。

最後に、私は昨年度、塾高から大学までの一貫教育における計7年間のバドミントン生活が終り、新しいOBの世界に加わり、社会への第1歩を踏み出した次第である。今考えても、他校のレベルアップの

ため、伝統維持、向上という事は慶応の体育会各部の共通の悩みであると思うが、セレクションという制度があり、優秀な能力を持つ選手を有する早稲田等の上位校に勝つためには、伝統そしてそれ以上の合理的練習、且つ精神面での変革が必要不可欠ではないかと思う。練習のための練習ではなく、勝つための練習というものを真剣に考えなければならぬ。

これからも大学生・高校生を問わず現役の諸君は、整体育会の精神的な母胎である「練習は不可能を可能にす。」という小泉信三氏の言葉を信じて、日々自分に厳しく努力して欲しい。現役のプレーヤーにしか挑戦権が与えられないのだから。

関西遠征の思い出

大束 陽介 (平成4年卒)

平成3年3月、整体育会バドミントン部は、関西の1部の大学と練習試合を行うことになった。それは、昨年のエースであった諷訪さんが抜けて、春のリーグ戦では、苦戦を強いられそうであったからである。

日程としては、関西のサントリーで、山本さん、宮崎さんの御厚意で合宿を行った後1週間にわたって行われる予定であった。私は、主務をやっていたので、主将の松井から、その計画を言い渡されて、早速、電話連絡にかかった。最初は、関西の地理や、どこが大学が強いかわからず、なかなか、戸惑うことも多かったが、同志社大学の主務の中村君のおかげで、連絡先がつかめ、何とか、練習試合の約束を交わすまでには至った。が、最初は、練習試合の申し込みが、イタズラ電話と勘違いされ閉口したこともあり、慶応のネームバリューを再認識した。

主務としての能力を周囲から疑問視されていた私が、この遠征でやってしまった、最大のへまは、宿泊地が、実際の試合の場所から相当離れてしまったことと、日程が、急なことであった。関西の大学と言うことで、安易に、みな、大阪にあるものと思い、何のためらいもなく、大阪の江坂に宿泊地をとってしまった。しかし、あとで、約束をしてからわかったことは、みな、ほとんどの大学が京都にあるということ、これがために、毎朝、皆を満員電車で疲労させることになってしまった。今、思うと、本当に恥しい限りだが、その時は、当の本

人は、大真面目であり情けないとつくづく思う。皆、文句は多少は言っていたが、そういった中で、一生懸命試合してくれたことに御礼を言いたい。

さて、実際の試合の内容はどうであったかという点、あまり、胸をはって言えるような結果ではなかった。力的に見て、関西の1部の大学は、大体、関東の2部くらいであり、当然、春のリーグ戦を戦っていく上では、これらの相手に勝ち越すくらいの力が必要であった。部員全員、意気込んで臨んだものの、そのもくろみは、最初の立命館戦で、見事に、おき飛んでしまった。何しろ、合宿明けで、思うように体が動かないとはいえ、あまりに粗い試合をやってしまった。結果は4—3で負けた。この悔しさを晴らすべく、私達は、試合が終了した後、金閣寺までランニングした。その日の晩、立命館のOBの御厚意で、主将主務等、両校幹部同士の交流があり、手厚いもてなしを受けた。このときは、慶応でバドミントンを出来ることの幸せを、ひしひしと感じたが、逆に、このような、幸せな環境にいなから、力が足りない自分に歯がゆさをも感じた。次の京産大戦は、楽勝であったが、3戦目以降は再び、苦杯をなめつつづけた。結果は1勝5敗と大きな課題を春リーグに残すことになった。

今、この遠征を振り返ってみると、過去の先輩の中には、海外へ出かけて遠征された方々もいて、そういったものから比べたら、大したものでなく、遠征という言葉も適切かどうか、わからないが、春リーグを戦う上で私達にとって、切実なものであったことは間違いない。又、大学間の試合の交流というものがあまり行われていないという現状からすれば、意味のあることであったというのも間違いないと思う。今、この遠征について、この記念誌に寄せて、書かせて頂いたのは、この遠征が私の、最後の1年間の縮図のように感じられるからである。正直言って、苦しくもあり、又、屈辱に満ちた1年間であり、この1年を振り返って省みるとき、どうしても、この遠征のことが頭に浮かぶのである。それは、この遠征の結果として、この後の1年間の試合の内容があるように思えるからである。

最後に、先輩方には、この遠征に多大なご援助を頂きまして誠に有難うございました。

監督より50周年記念に寄せて

清水 政明 (昭和52年卒)

慶応義塾バドミントン部創部50周年おめでとうございます。日本のバドミントン界のパイオニアとして、このように長い間クラブを支えてこられたのも数多くの諸先輩方ならびに後輩達の努力のためだと思います。そしてこの伝統あるクラブで監督を務めさせていただき本当にありがとうございます。

監督を依頼された時は、私のような者がこの伝統あるクラブの監督などとんでもないと思いました。が部は長い間お世話になっている自分が少しでも恩返しをするのは今しかないと思い就任いたしました。また当時、私の弟や、その弟と共に塾でバドミントンを一緒にやっていた後輩達が数多く現役でいたことも大きな動機だったと思います。

監督の苦勞話など数えあげればきりがありません。なんといっても慶早バドミントン定期戦では連敗につぐ連敗でありましたし、関東リーグ戦では、とても1部復帰などは口にすることもできない状態です。現に今、この原稿を書いている時は誠に残念ながら3部校となっており。とにかく強いクラブにしたい、またそうするためには何をなすべきか考え、そして、強いクラブになった時には、結果的にもかもしれません。部員の1人1人が学生としてまた1人の人間として大きく成長しているはずだとの信念のもとに監督を続けております。しかしなかなか現実はいまうまきません。が、泣き事など言わず今後とも、部のためにそして部員のために頑張っていくと思っています。

監督をやっているいやな事ばかりではありません。若い部員達と一緒にプレーをして、酒を飲み馬鹿な話をしている時は実に楽しいものです。特に相手が女子部員でしたら最高です。そんな中で私の最も興奮した鮮明な思い出と言えば、平成元年、加藤主将のもと慶早バドミントン定期戦において12年ぶりの勝利をあげた時でした。当時部員には加藤主将をはじめ普通部あるいは高校から長い間一緒にバドミントンをしてきた者が多く、私の弟も4年生でレギュラーとなっており。とにかく慶早戦には苦しい思い出ばかりで、私が現役時代も4連敗で通算13連敗を喫し、卒業したら後輩達が勝ってくれました。しかし、これは実に複雑な思い出でありました。やはり、学年のあまり離れていない先輩、後輩というのは良き仲間であると同時に最たるライバ

ルでもあります。その彼等が自分達の成しえなかったことをしてくれ
たというのは大変嬉しくもありましたが、少しばかり悔しい思いもあ
ったというのが正直なところです。

その後もコーチをさせていたんだりしながら後輩達の活躍を期待
しておりましたが残念ながら慶早戦に勝つことはできませんでした。
そのような時に監督となり、まずは早稲田に勝ちたいと思い、加藤君
も主将となったその時に今年の目標は「打倒、早稲田にしよう」と部
員の前で発表しました。その年の慶早戦も、正直に言えば早稲田有利
ではないかと思いましたが見事勝つことができました。当時、2年生
だった角田の気力あふれるシングルス。実力的には、はるかに相手が
勝っているにもかかわらず気力をふりしぼって粘り続けた松井のシ
ングルスまた加藤・清水組のダブルス。1年生の時の汚名挽回とばかり
に相手につけるすきを与えなかった諏訪、そしてなんといつても、
正に勝負所となった高田・土屋組のダブルスの勝利。それもフライン
グセットのセットインシングのラストオールという切迫した状態での見事
な勝利。まさに、チームワークの勝利であったと思います。

数えあげればきりのないものでありますが、今後とも慶応義塾体育
会バドミントン部のますますの活躍を祈り、またそのためにはわずか
ばかりではありますが、力になりたいと思いはべんを置かせていただき
ます。